

【十五段】

141 我が身は、片足が悪いうえにつながれて自由のない雌羊のようで

142 さらに、かさができたうえに体の自由が利かず、飛べない雀のようでもある。

143 (そんな不自由な体ながら)無理やりにかきねの外を望み

144 人目を忍んで戸口や窓の前をうろついている。

145 (九月となり)目をやれば、(空気が澄み)遙か彼方の山々がはなだ色に輝き、(くつきりと)見えるようになった。

146 (秋が深まり静寂さが訪れ)小川ははるか遠くまでさらさらと流れている音を聞き、(静かに)その様を思
いやる。

147 (こうした情景を目にすると)痩せて虚弱な身体も、にわかに健やかになるような気持ちがあるし

148 (こうした情景に)身を任せていると(病のことも忘れ)命も伸びる心地がする。

149 (その一方でこうした好時候に巡り合うと)茫然自失し、心(魂)が京都に馳せて行ってしまうのである。

150 まぶたを閉じると(改めて京の事が想起され)、目から涙が止めどもなく流れて出る。

【十六段】

151 都に帰れる日は いったいいつになるのだろうか。

152 故郷にたどり着けるのは いったいいつになるのだろうか。

153 振り返って想う、初めて仕官した頃を。

154 寸暇を惜しんで学問に専念し、聖賢の道を修行していた頃を。